

## 自我同一性に関する日中大学生の比較

水野 正憲

筆者が作成した「社会性確立」と「自我確立」を見る質問紙「自我同一性尺度 (IPS)」と、それを中国語に翻訳した質問紙 (IPS-C) を用いて、日本と中国の大学生について自我同一性のあり方について比較をおこなった。

両国のデータを因子分析した結果、第1軸が「自我確立」、第2軸が「社会性確立」とみせる、ほぼ同じような因子構造が確認できた。クラスター分析した結果、日本のデータは「責任感」「社会指向」「自立」「自己信頼」のクラスターに、中国のデータは「社会性確立」「自力指向」「自己信頼」に分かれた。両国の平均点を比較した結果、「社会性確立」では中国の大学生のほうが有意に高かったが、「自我確立」では両者に有意差は見られなかった。

**Keywords：**自我同一性，社会性確立，自我確立，大学生，日本，中国

### 目 的

「自我同一性 (Ego Identity)」は青年期を理解するときの鍵概念の一つである (Erikson, E.H. 1963)。筆者は「自我同一性」を「社会の中での自分の位置づけを自覚し社会における自分の役割を引き受けようとする」と「自分としての連続性や自分が自分であるということに確信が持てること (「自我確立」)」を統合した概念としてとらえて、研究を進めてきた (水野正憲, 1998, 1999, 2000, 2001, 2003)。

近年、学校を卒業しても就職せずにいるフリーターや、就職しないだけでなく訓練も受けようとしないうニート (NEET, Not in Education, Employment, or Training) と呼ばれる若者たちが問題になっている (玄田・曲沼, 2004)。こういう若者たちは、「社会性確立」も「自我確立」も不十分なままの状態にあるものと考えられる。日本では戦後長く続いてきた右肩上がりの経済成長の時代が終わって経済環境が厳しくなり、将来への夢や希望が持ちにくい時代になったといわれている。現在は大きな変化の時代にあるため、「社会の中で自分を位置づけること」と「自我を確立すること」を統合的にこなうこと

が困難になっている。

世界が大きく変化しつつあるこういう環境の中で、経済成長が鈍化して閉塞感が漂っている日本の大学生と、経済発展が著しい中国の大学生について、自我同一性のあり方を比較検討するのが本研究の目的である。

### 方 法

水野正憲 (1998) で作成された30項目の「自我同一性尺度 (Identity Pattern Scale, 略してIPS)」とそれを中国語に翻訳した質問紙 (IPS-C) を用いて、両国大学生の自我同一性の比較をおこなった。日本の被験者は岡山大学の学生、中国の被験者は中国の3つの大学の学生である。なお、中国語への翻訳と調査実施には、本年3月に岡山大学大学院教育学研究科学学校教育専攻を修了した中国からの留学生の董蕊さんの協力を得た。

質問紙IPSとIPS-Cの因子構造を見るために、主成分分解による因子分析をおこない2因子まで求めバリマックス回転をする。つぎに、クラスター分析によって各項目のまとまり方について、日中を比較しつつ検討する。

---

岡山大学教育学部教育心理学講座 700 - 8530 岡山市津島中 3 - 1 - 1

Ego Identity of Japanese Students and Chinese Students

Masanori MIZUNO

Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama, 700-8530

日中の大学生を比較するために、「社会性確立」「自我確立」の得点および各項目の得点について、平均値の差の検定をおこない、項目ごとに検討する。国別に男女差を検討し、男女間に有意差が見られない場合は男女をまとめた形で両国の比較をおこなうことにする。

## 結果と考察

まず、男女をまとめて両国の大学生を比較してよいかどうかを見るために、国別に男女の平均値の差を検討した。

日本の場合は、「社会性確立」男子  $M=50.73$  ( $SD=10.098$ ), 女子  $M=51.56$  ( $SD=8.608$ ), 「自我確立」男子  $M=42.43$  ( $SD=11.138$ ), 女子  $M=45.09$  ( $SD=10.780$ ), (男子81名, 女子153名)であった。中国の場合は、「社会性確立」男子  $M=57.54$  ( $SD=6.813$ ), 女子  $M=58.07$  ( $SD=7.431$ ), 「自我確立」男子  $M=46.96$  ( $SD=10.143$ ), 女子  $M=44.70$  ( $SD=9.449$ ), (男子98名, 女子91名)であった。なお,  $M$ は平均,  $SD$ は標準偏差を示している。どちらの国の場合も, 「自我確立」「社会性確立」とも, 危険率5%で有意

差が見られなかった。項目ごとの比較でも危険率5%で有意差が見られたのは, 日本の大学生では項目5, 9, 10, 26, 中国の大学生では項目20, 29と少なかったので, 男女をまとめた形で日中大学生の比較をおこなうことにした。

日本語の質問紙IPSの因子構造を見るために, 主成分分解による因子分析をおこない2因子まで求めバリマックス回転をした結果が表1と図1であり, 中国語の質問紙IPS-Cの因子構造を見るために, 主成分分解による因子分析をおこない2因子まで求めバリマックス回転をした結果が表2と図2である。

表1 自我同一性パターン尺度の因子分析(日本の大学生)

項目	F1	F2	$h^2$
1	-0.346	0.648	0.540
2	0.541	-0.098	0.303
3	-0.171	0.312	0.127
4	0.721	-0.146	0.541
5	-0.394	0.322	0.259
6	0.713	-0.068	0.513
7	-0.268	0.711	0.578
8	0.665	0.011	0.442
9	0.015	0.698	0.488
10	0.475	0.006	0.226
11	-0.349	0.567	0.443
12	0.554	0.079	0.313
13	-0.109	0.520	0.283
14	0.555	-0.312	0.405
15	0.073	0.534	0.290
16	0.631	-0.195	0.436
17	0.173	0.564	0.348
18	0.628	-0.004	0.394
19	-0.239	0.518	0.325
20	0.679	0.105	0.472
21	0.110	0.553	0.318
22	0.580	0.432	0.523
23	-0.030	0.660	0.437
24	0.544	-0.423	0.475
25	-0.115	0.450	0.216
26	0.454	-0.095	0.215
27	-0.114	0.717	0.527
28	0.679	-0.186	0.496
29	0.032	0.619	0.385
30	0.690	-0.170	0.505
固有値	6.276	5.545	11.821
寄与率	20.921	18.482	39.403

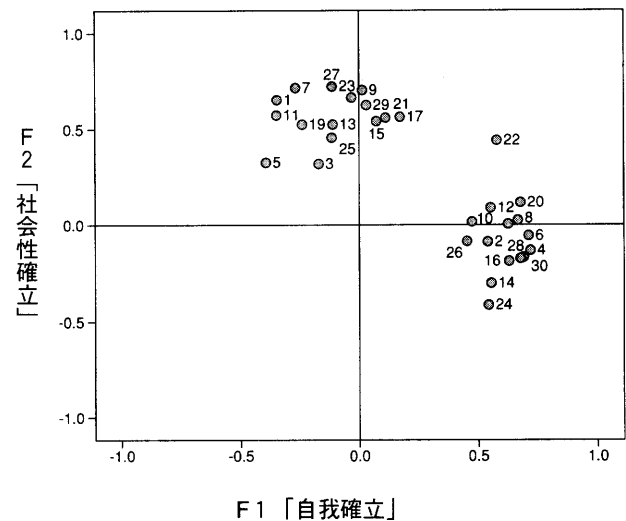


図1 自我同一性パターン尺度の因子分析(日本の大学生)

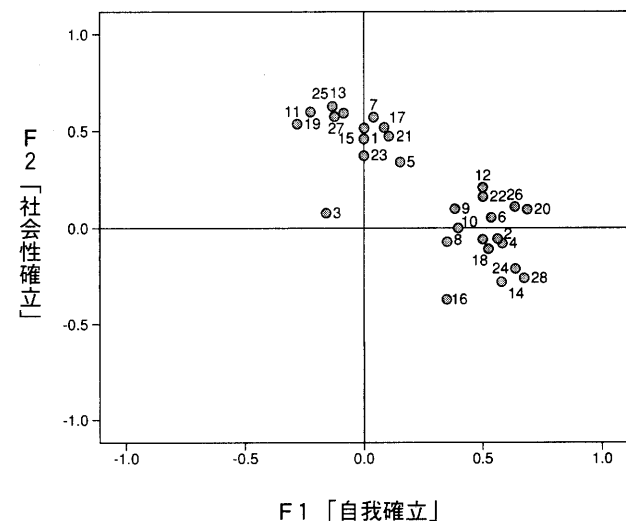


図2 自我同一性パターン尺度の因子分析(中国の大学生)

表2 自我同一性パターン尺度の因子分析(中国の大学生)

項目	F 1	F 2	h <sup>2</sup>
1	-0.006	0.462	0.213
2	0.512	-0.061	0.266
3	-0.152	0.077	0.029
4	0.592	-0.081	0.357
5	0.161	0.338	0.140
6	0.544	0.054	0.299
7	0.045	0.570	0.327
8	0.360	-0.073	0.135
9	0.394	0.100	0.166
10	0.409	-0.003	0.167
11	-0.218	0.597	0.404
12	0.505	0.208	0.299
13	-0.121	0.628	0.408
14	0.588	-0.284	0.427
15	0.008	0.514	0.264
16	0.362	-0.372	0.270
17	0.093	0.514	0.273
18	0.572	-0.063	0.331
19	-0.272	0.536	0.361
20	0.697	0.095	0.494
21	0.114	0.472	0.236
22	0.510	0.164	0.287
23	0.001	0.378	0.143
24	0.644	-0.212	0.460
25	-0.129	0.631	0.415
26	0.643	0.111	0.426
27	-0.116	0.578	0.348
28	0.682	-0.262	0.534
29	-0.079	0.591	0.356
30	0.531	-0.107	0.294
固有値	4.987	4.139	9.126
寄与率	16.625	13.798	30.423

日本の大学生の「自我同一性パターン尺度」の因子分析結果を図示した図1を見ると、偶数番号が横軸、奇数番号が縦軸にまとまっていることがわかる。偶数番号は「自我確立」の項目、奇数番号は「社会性確立」の項目である。日本の大学生のデータにおける因子構造は、2因子でかなりすっきりとまとまっていることが示されている。項目番号22「うわさを気にするほうである」は「自我確立」の項目であるが、「社会性確立」にも関連が強いようである。また、項目番号5「人の先頭に立って行動する」は「社会性確立」の項目であるが「自我確立」にも関連している。

中国の大学生の「自我同一性パターン尺度」の因子分析結果を図示した図2を見ると、日本の大学生の場合と同様に、ほぼ偶数番号が横軸、奇数番号が縦軸にまとまっていることがわかる。偶数番号は「自我確立」の項目、奇数番号は「社会性確立」の項目である。項目番号3「規則正しい生活をしている」は「社会性確立」の項目であるが、中国大学生の場合にはどちらの因子にもあまり関連していなかった。また、項目番号16「困難に直面するとしりごみしてしまう」は「自我確立」の項目であるが、「社会性確立」にも負の関連が強いようである。

全体的に見ると、日本の大学生と中国の大学生の「自我同一性パターン尺度」項目の因子分析結果は似ているが、いくつか違いが目につく項目がある。項目番号5「人の先頭に立って行動する」が「社会性確立」因子との関連では正のほぼ同じ位置にあるのに、「自我確立」因子との関連では正負の逆の位置にある。「自我確立」の項目は逆方向でたずねているので、正の方向が「自我確立」を妨げる方向である。日本の大学生の場合にはこの項目は「自我確立」を促進する方向に位置しているが、中国の大学生の場合にはこの項目は「自我確立」を妨げる方向に位置している。「人の先頭に立って行動する」ことが「自我確立」を促進することは理解できるが、「自我確立」を妨げる方向を示しているのはなぜだろうか。このことを解明するために、「自我同一性パターン尺度」のクラスター分析(平方ユークリッド距離を用いたWard法)をした結果が、図3と図4である。

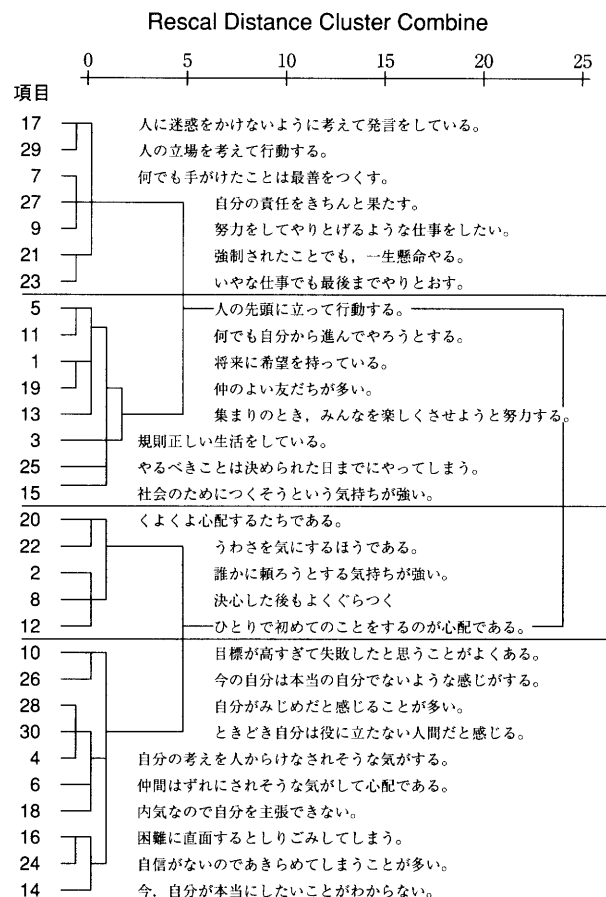


図3 自我同一性パターン尺度のクラスター分析(日本の大学生)

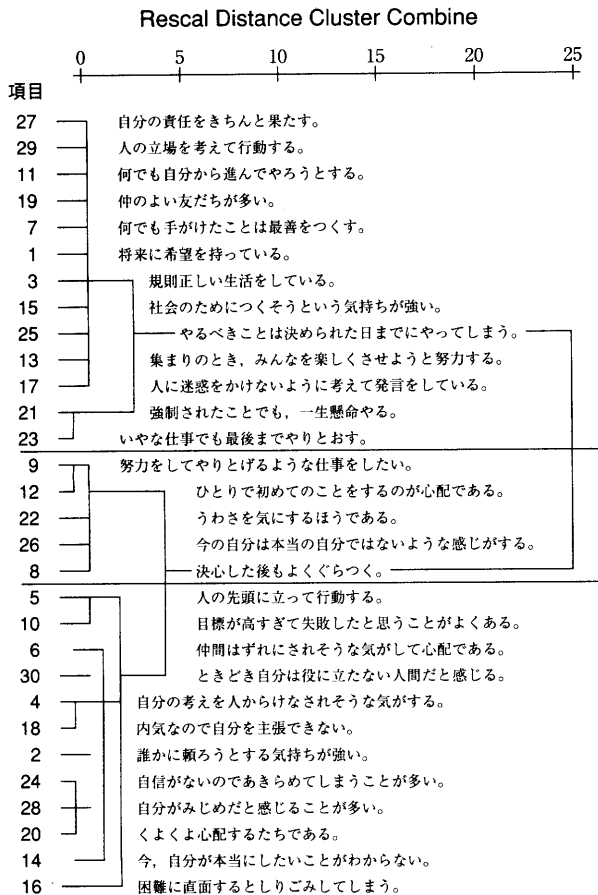


図4 自我同一性パターン尺度のクラスター分析  
(中国の大学生)

図3から、日本の大学生の場合は、項目番号5「人の先頭に立って行動する」は項目番号11「何でも自分から進んでやろうとする」と最も結びつきが強い。日本の大学生の場合、自分から進んでやろうとするときに、人の先頭に立つことがあるということを示している。これに対して、図4から、中国の大学生の場合は、項目番号10「目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある」と最も結びつきが強いことがわかる。日本の大学生の場合「目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある」と最も結びつきが強い項目は、項目番号26「今の自分は本当の自分ではないような感じがする」である。このことから、中国の大学生は高い目標を立てると、人の先頭に立って行動する傾向があり、その結果失敗するという経験をよくすることがうかがえる。これに対し日本の大学生は、高い目標を立てて失敗すると、自分自身に確信が持てなくなってしまう自我の弱さがあるように思われる。

以上のように、日本と中国の大学生ではいくらか違いが見られるが、全体の傾向としてはかなり似た因子構造をもっていることが示されたと言えよう。

次に両国のクラスター分析について比較検討する。

日本の大学生のデータをクラスター分析した結果を示した図3を見ると、「社会性確立」の項目と「自我確立」の項目がきれいに分かれていることがわかる。

「社会性確立」の項目のはじめのクラスターは「人に迷惑をかけないように考えて発言している」「自分の責任をきちんと果たす」「いやな仕事でも最後までやりとおす」というような項目がまとまっているので「責任感」と名付けた。次のクラスターは「人の先頭に立って行動する」「仲のよい友だちが多い」「社会のためにつくそうという気持ちが強い」というような項目がまとまっているので「社会指向」と名付けた。「自我確立」の項目のクラスターは「くよくよ心配するたちである」「誰かに頼ろうとする気持ちが強い」「ひとりで初めてのことをするのが心配である」というような項目がまとまっているので依存性に関するクラスターと考え、方向を「自我確立」の方向にして「自立」と名付けた。次のクラスターは「目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある」「ときどき自分は役に立たない人間だと感じる」「困難に直面するとしりごみしてしまう」「自信がないのであきらめてしまうことが多い」というような項目がまとまっているので自信欠如のクラスターと考え、方向を「自我確立」の方向にして「自己信頼」と名付けた。

以上から、日本の大学生の場合、自我同一性における「社会性確立」の側面は「責任感」と「社会指向」というクラスター、「自我確立」の側面は「自立」と「自己信頼」というクラスターから成り立っているものと考えられる。

中国の大学生のデータをクラスター分析した結果を示した図4を見ると、「社会性確立」の項目と「自我確立」の項目が日本の大学生のようにきれいには分かれていないことがわかる。このことは本尺度が日本の青年のデータを元に開発されたものであるためと考えられる。日本の青年の場合は「社会性確立」に分類された項目のうち、9「努力してやりとげるような仕事をしたい」と5「人の先頭に立って行動する」の項目が、中国の大学生の場合には「自我確立」の項目に分類された。日本の青年の場合、これらの項目は社会の期待に応じて行動するという受け止め方をされて「社会性確立」の項目に分類されたものと考えられるが、中国の大学生の場合は、自分の内面からの欲求ということで「自我確立」の項目に分類されたものと考えられる。これら2項目を除いた「社会性確立」の項目はひとつのクラス

ターにまとまっている。「自我確立」の項目を見ると、「努力をしてやりとげようような仕事をしたい」「ひとりで初めてのことをするのが心配である」「決心した後もよくぐらつく」というような項目がまとまっているので、方向を「自我確立」の方向に統一して「自力指向」のクラスターと名付けた。次のクラスターには「人の先頭に立って行動する」「目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある」「ときどき自分は役に立たない人間だと感じる」「自信がないのであきらめてしまうことが多い」「困難に直面するとしりごみしてしまう」というような項目がまとまっており、これらは日本の大学生の結果とよく似ているので、このクラスターを「自己信頼」と名付けた。

以上から、中国の大学生の場合、自我同一性における「社会性確立」の側面は一つのクラスターにまとまっており、「自我確立」の側面は「自力指向」と「自己信頼」というクラスターから成り立っているものと考えることができる。

日本の大学生と中国の大学生のクラスター分析の結果を比較することで、以下のような違いが浮かび上がってきた。

日本の大学生においては、社会性を確立するためには社会に関心を向け自分の責任を果たそうという構えが重要であることがうかがえる。それに対し、中国の大学生では、社会性の確立は当然の発達の方向として受け止められているように思われる。「自我確立」の側面では、両国の大学生とも「自己信頼」が重要な要因となっている。「自我確立」の側面における違いは、日本の大学生では「自立」、中国の大学生では「自力指向」がもう一つの要因という点である。日本の大学生においては、親や他者に依存

することなく自立する構えを持つことが、自我を確立するときの重要な要因と考えられる。これに対し、中国の大学生では、自分で決めた努力がいることをまわりを気にせずに自力でやりとおす「自力指向」が、自我を確立するときの重要な要因となっているものと思われる。日本の大学生においては「人に頼らずに自立すること」が自我の確立に重要な位置を占めるのに対し、中国の大学生では「自力でやりとおすこと」が自我の確立に重要な位置を占めるものと考えられる。このことから、自己信頼を基盤とした上で、日本の大学生は自分を守ろうとする防衛的な自我確立、中国の大学生は競争的で能動的な自我確立という傾向をもつことが推測できる。

両国大学生の自我同一性について、より詳細に検討するため、自我同一性パターン尺度の各項目について、平均値を比較検討する。両国大学生の「社会性確立」各項目の平均値と「社会性確立得点」についてt検定の結果を示したのが表3、「自我確立」各項目の平均値と「自我確立得点」についてt検定の結果を示したのが表4である。\*が5%、\*\*が1%、\*\*\*が0.1%の危険率を示している。

まず表3の「社会性確立得点」を見ると、日本の大学生は51.27、中国の大学生は57.79で、危険率0.1%以下で有意に中国の大学生のほうが「社会性確立得点」が高いことがわかる。

さらに表3より、危険率5%以下で有意差があった項目について、すべて中国の大学生が日本の大学生よりも社会性確立の方向に寄っていることがわかる。日本の大学生は中国の大学生に比べて、将来に希望を持ちにくく、規則正しい生活をしておらず、

表3 日中大学生の「社会性確立」項目平均の比較

項目	日本大学生	中国大学生	t	項目内容
1	3.44(1.086)	4.39(0.761)	10.477 ***	将来に希望をもっている。
3	2.76(1.322)	3.97(0.890)	11.273 ***	規則正しい生活をしている。
5	2.78(1.076)	2.97(1.177)	1.741	人の先頭に立って行動する。
7	3.67(1.017)	4.13(0.944)	4.684 ***	何でも手がけたことは最善をつくす。
9	3.92(1.134)	3.70(1.188)	-1.899	努力をしてやりとげようような仕事をしたい。
11	3.14(1.053)	4.06(0.960)	9.316 ***	何でも自分から進んでやろうとする。
13	3.41(1.094)	3.72(1.098)	2.918 **	集まりのとき、皆を楽しませようと努力する。
15	2.97(1.123)	3.84(0.962)	8.469 ***	社会のためにつくそうという気持ちが強い。
17	3.65(0.974)	3.87(1.107)	2.177 *	人に迷惑をかけないように考えて発言している。
19	3.38(1.099)	3.97(1.021)	5.630 ***	仲のよい友だちが多い。
21	3.48(1.061)	3.35(1.099)	-1.177	強制されたことでも、いっしょうけんめいやる。
23	3.62(0.915)	3.74(0.991)	1.246	いやな仕事でも最後までやりとおす。
25	3.44(1.221)	3.88(1.035)	4.080 ***	やるべきことは決められた日までにやってしまう。
27	3.91(0.947)	4.07(0.997)	1.730	自分の責任はきちんとはたす。
29	3.67(0.888)	4.04(0.906)	4.234 ***	人の立場を考えて行動する。
得点	51.27(9.141)	57.79(7.096)	8.143 ***	

表4 日中大学生の「自我確立」項目平均の比較

項目	日本大学生	中国大学生	t	項目内容
2	3.23 (1.121)	2.74 (1.154)	-4.372 ***	だれかに頼ろうとする気持ちが強い。
4	2.95 (1.139)	2.85 (1.020)	-1.007	自分の考えを人からけなされそうな気がする。
6	2.91 (1.206)	2.93 (1.259)	0.174	仲間はずれにされそうな気がして心配である。
8	3.37 (1.154)	3.19 (1.133)	-1.582	決心したあともよくぐらつく。
10	2.92 (1.206)	2.85 (1.112)	-0.672	目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある。
12	3.43 (1.232)	3.65 (1.090)	1.893	ひとりで初めてのことをするのが心配である。
14	3.05 (1.335)	2.71 (1.277)	-2.681 **	今、自分が本当にしたいことがわからない。
16	3.09 (1.028)	2.32 (1.174)	-7.017 ***	困難に直面するとしりごみしてしまう。
18	2.84 (1.159)	3.01 (1.185)	1.473	内気なので自分を主張できない。
20	3.36 (1.297)	2.80 (1.295)	-4.378 ***	くよくよ心配するたちである。
22	3.67 (1.179)	3.31 (1.237)	-3.071 **	うわさを気にするほうである。
24	2.61 (1.027)	2.99 (1.231)	3.427 ***	自信がないのであきらめてしまうことが多い。
26	2.49 (1.212)	3.30 (1.250)	6.774 ***	今の自分は本当の自分でないような感じがする。
28	2.86 (1.239)	2.66 (1.209)	-1.729	自分がみじめだと感じる人が多い。
30	3.02 (1.232)	2.78 (1.222)	-1.993 *	ときどき自分は役に立たない人間だと感じる。
得点	44.18 (10.954)	45.85 (9.848)	1.630	

社会のためにつくそうという気持ちが弱く、自分から進んでやろうとする気持ちや手がけたことに最善をつくすことが少なく、人の立場を考えて行動したり、やるべきことを期日までにやったりする傾向が弱く、仲のよい友だちが少ないと感じている。経済的に高度成長の中にある中国では大学生の社会との関わり方が積極的であるのに対し、高度経済成長が終わって成熟社会に入った日本では大学生の社会との関わり方はさめた消極的なものになっているように思われる。t 値の大きな項目を見ると、「規則正しい生活をしている (t=11.273)」「将来に希望をもっている (t=10.477)」「何でも自分から進んでやろうとする (t=9.316)」「社会のためにつくそうという気持ちが強い (t=8.469)」である。これらのことから、日本の大学生は中国の大学生に比べて、社会へのコミットメントが弱いことがうかがえる。中国の大学生では「将来に希望をもっている」の項目の平均が4.39で「社会性確立」項目の中で最も高いのに対し、日本の大学生では3.44で中くらいである。「将来への希望」が社会との関わりに大きな影響を与えるように思える。将来に希望をもっていれば、社会のために自分の最善をつくし積極的に行動しようという構えができやすい。青年にとって希望とは生きるための基盤である。これが弱いと力強く生きていくことが難しくなってしまう。

このことについて詳しく見るために、「将来に希望をもっている」への回答を日本の大学生と中国の大学生で比較したのが、図5と図6である。

図5から図12までの円グラフで指標として用いられている1から5までの数字は、1「まったくあてはまらない」、2「あまりあてはまらない」、3「どちらともいえない」、4「かなりあてはまる」、

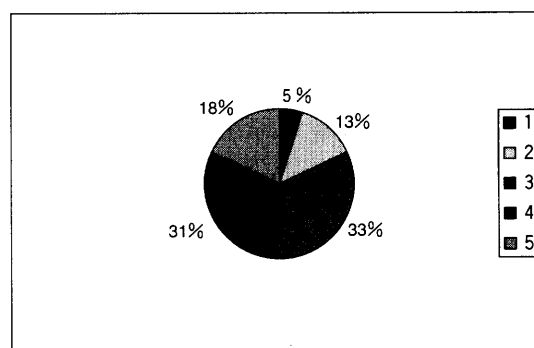


図5 日本の大学生の「将来に希望もつ」の割合

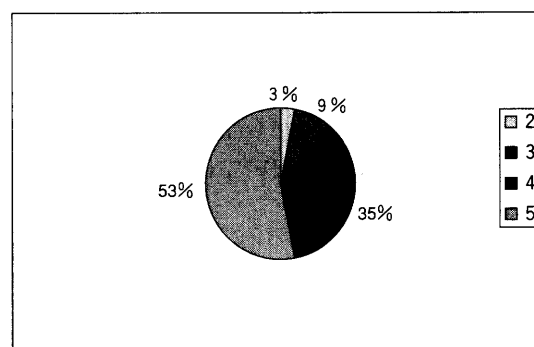


図6 中国の大学生の「将来に希望もつ」の割合

5「非常にあてはまる」という回答を示している。

日本の大学生では「将来に希望をもっている」にあてはまると答えた割合（4と5と回答した人）が49%であったのに対し、中国の大学生では88%であった。さらに日本の大学生では「まったくあてはまらない」つまり「まったく将来に希望をもっていない」と回答した人が5%いたが、中国の大学生では0%であった。「あまりあてはまらない」と回答した人も含めると、日本の大学生では18%になるが、中国の大学生では3%である。この結果は、現代日

本における青年期の根底に関わる問題のように思われる。「希望格差社会」ということも言われるように（山田昌弘，2004），将来に希望が持てるかどうかは青年の自我同一性確立にとって決定的な意味をもっている。山田（2004）は「実は，現在起きている状況の中で最も深刻なのは，この『希望の喪失』なのである。皮肉にも高度成長期を経て，ある程度の裕福な生活が達成されたいま，人々が幸福に生きる上で必要なのは，経済的な要件よりも，心理的な要件である。人間は希望で生きるものだからだ（P21）」と述べている。現在の日本において，岡山大学の学生は比較的恵まれた位置にあるように思われるが，それでも2割近くが将来に希望がもてないと感じているのである。中国の大学生では3%である。この数字は，現代日本の大学生が中国の大学生に比べて希望を持ちにくい状況にあることを示唆している。

次に，社会へのコミットメントをたずねている「社会のためにつくそうという気持ちが強い」という項目への回答の分布を示したのが，図7と図8である。

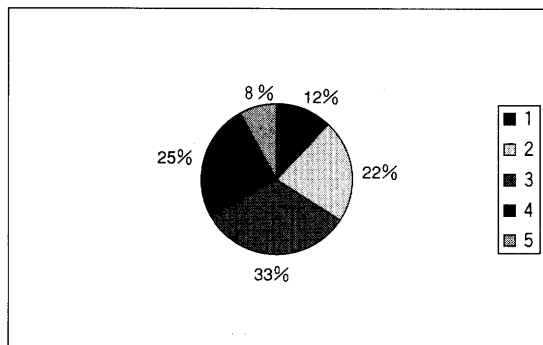


図7 日本の大学生の「社会のためにつくす」の割合

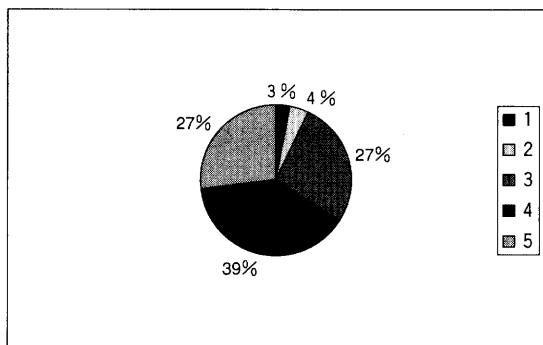


図8 中国の大学生の「社会のためにつくす」の割合

日本の大学生では，「社会のためにつくそうという気持ちが強い」という項目に「当てはまる」と回答したのが33%であったのに対し，中国の大学生

では66%と2倍の割合，「あてはまらない」と回答した割合は日本の大学生が34%，中国の大学生が7%と大きな開きがあった。日本の大学生においては，社会へのコミットメントの低さが際だっている。日本の大学生では，社会にコミットしようという気持ちがある人が3分の1，社会にコミットする気がない人が3分の1，どちらとも言えない人が3分の1という分布である。

山田（2004）も指摘しているように「現在の日本社会は，『努力が報われない機会』が増大する社会となってしまった」ため，「努力が報われにくい社会」と感じている青年は，そういう社会のためにつくそうという気持ちが弱くならざるをえない。現在の日本社会は青年の社会性確立を困難にしており，そのことが青年の自立を遅らせていると考えられる。

現代中国の大学生は，現代日本の大学生に比べて国内ではより恵まれた位置にあると考えられる。中国国内での格差は拡大しているようであるが，大学生は国の経済成長とともに発展できるという希望をもちやすい環境にいるため，「社会のためにつくそうという気持ちが強い」と思っている人が3分の2に達しているのであろう。

次に「自我確立」の側面について，日本と中国の大学生を比較検討する。表4を見ると「自我確立」の側面は「社会性確立」の側面とは異なった傾向を示している。

まず表4の「自我確立得点」を見ると，日本の大学生は41.18，中国の大学生は45.85で，有意差がないことがわかる。「社会性確立得点」では，はっきりとした差があったが，「自我確立得点」では有意差は見られなかったのである。ここで，「自我確立」の項目は方向が「自我確立」とは逆向きなので，方向を逆転して「自我確立得点」を求めている。したがって，「自我確立得点」が大きいほうが「自我確立」が進んでいると見なすことができるが，ここでは有意差は見られなかった。「自我確立」の側面においては，どちらの国の大学生のほうがより確立しているということはいえない。

表4で示した「自我確立」項目の平均値は，方向は逆転せずに採点してある。つまり，「まったくあてはまらない」は1，「あまりあてはまらない」は2，「どちらともいえない」は3，「かなりあてはまる」は4，「非常にあてはまる」は5と得点化した。したがって，3以上のときは「その項目で述べられている傾向」にどちらかというにあてはまり，3未満のときは「その項目で述べられている傾向」にど

ちらかというとはあてはまらないと見ることができる。

表4より、「自我確立」項目では、日本の大学生の平均値のほうが大きい項目と中国の大学生の平均値のほうが大きい項目が混在していることがわかる。各項目は「自我確立」と逆の方向で述べられているので、そのことを考慮に入れながら考察する。

日本の大学生のほうが中国の大学生よりも有意に強い傾向を示した項目は、「だれかに頼ろうとする気持ちが強い」「今、自分が本当にしたいことがわからない」「困難に直面するとしりごみしてしまう」「くよくよ心配するたちである」「ときどき自分は役にたたない人間だと感じる」「うわさを気にするほうである」の6項目である。これらから、日本の大学生は中国の大学生に比べ、「自分の本当にしたいことが不明確で、自分が役にたたない人間だと感じ、困難に弱く、人への依存心が強く、心配性でまわりの人を気にしている」という傾向が認められる。

中国の大学生のほうが日本の大学生よりも有意に強い傾向を示した項目は、「自信がないのであきらめてしまうことが多い」「今の自分は本当の自分でないような感じがする」の2項目である。これから、中国の大学生は日本の大学生に比べ、「本当の自分を実感しにくく、自信がもてずにあきらめる」傾向が強いことがうかがえる。逆に日本の大学生は中国の大学生に比べると、「自分らしくあることができ、あきらめることが少ない」という傾向があるとまと

められる。

ここで、両国の違いが明確に現れている「だれかに頼ろうとする気持ちが強い」と「今の自分は本当の自分でないような感じがする」の項目について、両国の回答分布を見ることにする。

「だれかに頼ろうとする気持ちが強い」の項目に、「あてはまる」方向（4と5）で回答した割合が日本の大学生が42％、中国の大学生が26％であり、「あてはまらない」方向（1と2）で回答した割合は日本の大学生が29％、中国の大学生が41％であった。日本の大学生は中国の大学生に比べて自立度が低いことがうかがえる。

「今の自分は本当の自分でないような感じがする」の項目に、「あてはまる」方向（4と5）で回答した割合が日本の大学生が22％、中国の大学生が47％であり日本の大学生の2倍以上、「あてはまらない」方向（1と2）で回答した割合は日本の大学生が56％、中国の大学生が25％で日本の大学生の半分以下であった。日本の大学生と比べて中国の大学生は「今の自分は本当の自分でないような感じがする」にあてはまるとした割合がかなり大きい。このことは中国の大学生は日本の大学生と比べ、自分が親など大人世代の路線に乗せられて動かされていると感じることが多いためではなかろうか。今の中国の大学生は一人っ子政策の中で成長した世代であ

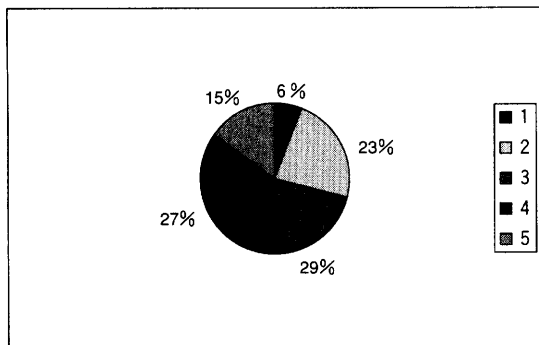


図9 日本の大学生の「だれかに頼ろうとする」の割合

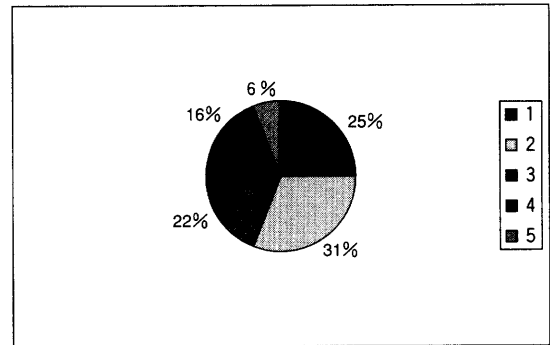


図11 日本の大学生の「今の自分は本当の自分でない」の割合

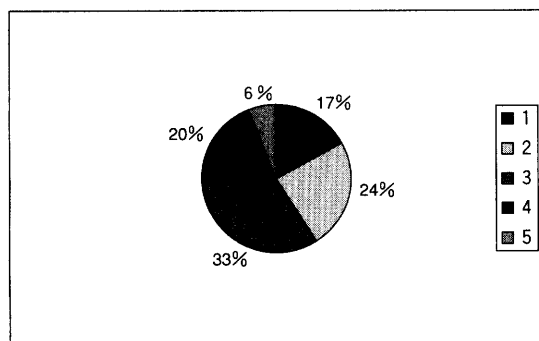


図10 中国の大学生の「だれかに頼ろうとする」の割合

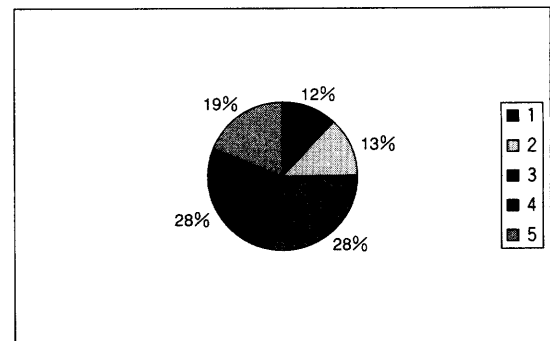


図12 中国の大学生の「今の自分は本当の自分でない」の割合



り、両親や祖父母の影響を強く受けているものと考えられる。そのため、本当の自分という実感がもたにくくなっている可能性がある。

以上のように「自我確立」の側面では、日本の大学生と中国の大学生では国の事情や文化の影響で「自我確立」が促進されている面と阻害されている面が異なるため、全体としては有意差が見られなかったものと考えられる。

自我同一性の形成について日本の大学生と中国の大学生を比較した結果、「社会性確立」の側面では中国の大学生のほうが進んでいたが、「自我確立」の側面では両者に有意な差は見られなかった。日本の大学生の自我同一性確立のためには、社会とのコミットメント、そのための将来に希望がもてる社会ということが重要な要因ということが示唆された。中国の大学生の自我同一性確立のためには、自分らしさを実感できるような社会のあり方が重要なことのように思われる。

#### 引用文献

Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society*,  
Second Edition Revised and Enlarged. W. W.

Norton & Company, Inc. (幼児期と社会 I , 仁  
科弥生訳 みすず書房 1977)

玄田有史, 曲沼美恵 2004 ニート フリーターで  
もなく失業者でもなく 幻冬舎

水野正憲 1998 自我同一性の型を測定する質問紙  
「自我同一性パターン尺度IPS」の検討 岡山大学  
教育学部研究集録第107号 151-158

水野正憲 1999 「自我同一性パターン」の検討  
(1) 対人関係・規範意識・進路意識との関係  
岡山大学教育学部研究集録第110号 87-92

水野正憲 2000 「自我同一性パターン」の検討  
(2) 幸福感および自己受容との関係 岡山大学  
教育学部研究集録第114号 11-17

水野正憲 2001 「自我同一性パターン」の検討  
(3) 時間的信念・時間イメージとの関係 岡山  
大学教育学部研究集録第118号 157-161

水野正憲 2003 「自我同一性パターン」の検討  
(4) 不安および交流分析の自我状態・透過性調  
整力との関係 岡山大学教育学部研究集録第123  
号 165-169

山田昌弘 2004 希望格差社会 筑摩書房